

トークイル・ダシー著

『万葉集と古代日本の想像の帝国』

Torquil Duthie. *Manyōshū and the Imperial Imagination in Early Japan.*

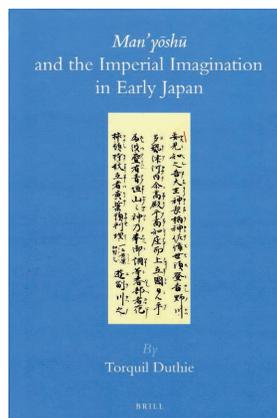
Leiden: Brill, 2014.

ギユスターヴ・ヘルト

『万葉集』を名に負う本書は、日本最古の文献が理解し総括するその世界が、君主 (sovereign, 皇) の言語と行動を中心とする時空に配された、ユニバーサルな帝国であると想像した方法を解き明かした点において、すぐれて『万葉集』論を超越したものとなっている。論述の主要な焦点は、六七二年の壬申の乱の勝利に続いて天武天皇(六二一―六八六)のもとで成し遂げられた、新しい王国の設立についてである。天武の後継者たちは、その後数世紀にわたって帝国の姿を定義づけることになる、国家の組織機構の創設を継承したが、その限りにおいて、天武の輝かしい戦勝は、日本の歴史にその後、陸続と出現したあまたの出来事の中でも、もつとも重大なものであると考えられてきた。『日本書紀』の中で

冗長なほどに関心を注入して叙述される記述に就けば、その印象はより強固なものとなるだろう。壬申の乱をめぐっては、『万葉集』も含めた歴史的な年代紀やその他の文献において、さまざまな説明がなされている。ダシーは、それら一つ一つを丁寧に参照することによって、古代日本の宮廷が、みずからの存在がより一般的なものであると想像するために施した時空の布置とともに、かの内乱のあと、共同体意識めいたものを創造するために用いられた、語りの多様性を強調する。

本書前半の五章では、古代日本の政策が描かれていった、いくつかの道筋について言及する。第一章では、三世紀から六世紀にかけて、漢帝国が政治的に崩壊したのち、そのテキストとしての



遺産が周縁へと拡がっていき、かつて夷狄<sup>いてき</sup>と考えられていた地域において、それぞれ新しい政治形態を形作り、北東アジアにおいて、多極的な世界が生成したことを明らかにする。古代日本は、いままさに、朝鮮半島の三国と、中国の南北朝という近隣諸国とともに、「天下」を構成する文明の中心あるいは周辺の朝貢国として互いに外交上の関係を保ち、帝国共通の言語を用いて、その一員としての役割を演じようとしていたのである。第二章では、古代日本国内の構築の問題へと議論を転じ、単一民族としての国民、そして不変の言語という、近代国家の幻想に則ってなされてきた研究史を徹底的に検証して批判し、近代国家に先立つ古典的国家像を描き出す起点とする。その構成員は君主中心的な氏族と位階のヒエラルキーにしたがつて区分されており、その言語は、多言語的な積義を通じて涵養された、いわば文学的な形式であつたという。

こうした古代日本の帝国に関する新しい視界は、続く第三章で展開され、「天皇」中心的に傾きがちな史観の中ではネグレクトされ続けてきた、支配者に対する呼称を考察する。そのことでまた、君主中心の帝国の時空間の形態を創造するために、宮殿と暦が演じてきた儀礼上の役割——それは、法令、詩、そして史書といった、そのための参考図書を組織・整備することでも示される——についての研究を把握することによって提供される。全体を包括

的に捉えるために、こうした世界観においては、相矛盾する過去についての説明を調整しなければならなかったが、第四章では、『古事記』『日本書紀』そして『懷風藻』にそれぞれ見出される、合法的な継承者であり、兄のライバルであり、そして破壊的な反逆者でもあるという、大きく異なる天武の相貌に光が当てられる。第五章では、歌集の編輯様式と段階に関して、近代的進歩的な説明が好むような線条的な年表ではなく、存する和歌の「無数の世代」を組織して君主中心主義的な地政学と系譜学へ落とし込むべく『万葉集』の多様なスキームにおいて稼働した、いわば等価値的に拡がる歴史の範囲を描き出す。

本書の後半にあたる残り五つの章は、天武の遺産を刻印する『万葉集』最初の二つの巻に載せられる、カノン化された一連の和歌の精読を行う。第六章では、日本語固有の詩歌においては、発話の主語が、固定化された文法規則よりは、むしろ文脈と内容によつて分節表現されるといふ在り方の用例として、歌集の最初の六首を取り上げて示しながら、一つの方法論を展開する。この流動性は、君主に対して忠誠を宣言する「われ(一)」がまた「われわれ(我々)」をもあらわすような和歌において「一人称のポリテイクス (a politics of first-person)」とダシーが名付ける事象を可能にする。第七章は、この集合的なアイデンティティについて、天武の後継者である持統天皇(六四五―七〇三)によつて行われた

行幸を記念する人麻呂の著名な歌群をめぐって考究する。こうした賛歌における忠誠心の表現に感情移入したり、あるいは拒絶したりする近代的な文学批評理論を紹介しながら、このポリティックスの分析を行ったのち、ダシーは、これらの和歌が、その和歌を聞く宮廷の聴衆を想像力豊かに引きつけ、彼ら自身の君主への服従というスペクタクルへと駆り立てるために、一人称の誓約が、これら和歌の語り手たちの三人称の叙述といかにして結びつけられるのかを示す。

同じような視点の複雑な結合については、天武の二人の皇子に向けられた人麻呂のよく知られた独特の葬送歌に関する、第八章の論述で取り上げられる。草壁皇子（六六二―六八九）に対する、尋常ならざる非人称の挽歌の出だしでは、天武の神聖な後裔を描き出す祈りと神話を語り伝えた定型的なフレーズが用いられる。聴衆は、こうした過去を目の当たりにさせられたあと、現在の嘆きの瞬間へと引き戻される。高市皇子（六五四―六九六）に向けられた、他に例を見ない長い挽歌では、歌の視点がわずかに移動することによって二つの側面を表す壬申の乱の叙述において、日本の詩歌の一つの伝統である、武勇の要素を、この神話的言語に付け加える。そしてこの着眼は、第九章での人麻呂による連作の和歌の読解における、破れし者へと転じていく。旧都である近江への旅を描くこの和歌は、この近江の地が、持統の宮廷にだけアク

セス可能な、ほど遠い天離る鄙あまざかの地であると風聞を通して描き、刻印するのである。第十章は、文武（六八三―七〇七）として即位する天武の孫を中心とした、巻一の前半を区切る和歌を論じて締めくくられる。それは、阿騎あきの野を詠む人麻呂歌において、文武の未来の即位を願う集団的な欲望を表現し、かつ新しい藤原宮の建設をことごとく一連の歌において、文武が王国の創始者であり神でもあるというステイタスを、追って確認することにより、果たされるのである。

この本が提供する多くの考察は、表向き焦点として示された七世紀の問題をはるかに超え、我々の古代日本に対する理解を拡大する可能性を潜在している。今日、私たちが繰り返し参照する『万葉集』と『日本書紀』は、九世紀から十世紀にかけて作られた、注記、編集、講義、そして注釈書のたまものであり、その意味においてこの両書は、奈良時代以前のそれだけでなく、平安時代に見像された古代性の一塊をも提示していると言いうるものである。かくしてダシーが、『万葉集』における皇室の地理学と系譜について構造的な重要性を強調して描き出すことは、たとえば、その後継者を自認するものにもたらされた帝国の世界観が著しく異なったものとなったその様相について、私たちがより大きな理解を得ることを助けることだろう。『万葉集』において、皇室の歴史を表現するために用いられた多様な（そして時には相矛盾する）いくつ

かの構造的スキームに代わって、『古今集』では、自足的に固く閉じられ、そして歴史とは無関係に想像された「天の下」——その始まりと終わりが和歌によつて再現される四季と皇室の儀礼との永遠に循環するサイクルに抱かれた、人間の時空の全体性が存する国土としてあるもの——を私たちにもたらす。

限られた紙数では、この該博な調査と、博覧強記な考察が提供しているはずの豊富なことから、情報、内察のすべてを、十分に正に伝えることはできない。本書では、取り上げた文献や歴史的な事象に関して、現代の研究を十分に咀嚼した上で提示するが、それに加え、ダシーはまた、日本の古代和歌に対する語り論について、理論的に十分な知識を有し、言語学的にも微妙なニュアンスを押さえながら応用して、彼独自の卓越した考察を提示している。この時代の散文と詩において、描写と語りの装置として明確に共有されていたレパートリーに光を当てることで、著者はさらに、近代の学問がデイシプリンとして分断してしまった、歴史と文学との間を横断し、「文学性」——古典的なコーパスに立脚した文化的リテラシーの一つの形態として——の前近代に特徴的な定義へと到達する。これらの、また多くの他のさまざまな点においても、この本は、英語圏での日本古代に関する研究領域に対して、もつとも歓迎されるべき、かつ重要な貢献をなす書の一つである。

\* 本稿は *Japan Review* 28 (2015) に掲載された英文テキストの日本語訳である。  
(荒木浩 訳)